

保健所（保健婦）が関わったハイリスク児（極低出生体重児）の事例

（分担研究 ハイリスク児の発達支援トータルケアのシステム化に関する研究）

分担研究者：前川喜平¹⁾

研究協力者：川上義²⁾、庄司順一³⁾、神谷育司⁴⁾、吉永陽一郎⁵⁾

保健所を中心とした地域でのハイリスク児の発達支援の現状を把握し、問題点を明らかにするため、保健婦が実際に関わったケースの中で、困った例、印象に残った例、他の機関（病院・児童相談所）との協力が必要だった例などの紹介を、全国の保健所に要請した。今回はハイリスク児の中でも極低出生体重児を対象とした。

640ヶ所の保健所に依頼状を送付し、35保健所から46例の事例を頂戴した。

事例の内容は大きく分けて、虐待、障害児の療育、家庭環境（問題のある親）、外国人、親の会、保健所の育児支援システムについてであった。

以下に事例の要約を示す。なお、「」内が空白の例は標題が記されていない例である。

1. 「多胎児を抱える家族」

養育医療の申請の際に、愛着関係に問題を感じ、保健婦・MSWと関わっていたが、虐待により脳出血で入院。結局、施設入所となった例。

2. 「」

母は療育手帳Bを所持し、養護学校卒。児は発達の遅れあり、集団入所を勧め3歳より保育所での保育を開始しているが、すぐに自分の世界に入りこみ、一人遊びが中心。今後も、保育所・子育て支援センター・町保健婦・保健所保健婦との連携を継続。

3. 「ネグレクト傾向にある重複障害児の就学問題について」

脳性麻痺・視力障害（未熟児網膜症）の児。専業農家で両親ともに働いており、仕事以外の時間は本児にかまうより、姉・兄の身の回りのことや地域の付き合いを優先している。養護学校は毎日の送迎ができない、盲学校は通学が大変、入寮の学校でも土日の送迎が大変とネグレクト傾向のある例。

4. 「順調な経過をたどったケースA」

母は21歳と若く、第一子であったが、訪問・連絡をしながら関わり、順調な発達経過であった。

5. 「順調な経過をたどったケースB」

母は父と別居し、入籍の意志なし、失業保険で生活。第一子の兄と3人家族。訪問・電話連絡で関わり、順調な発達であるが、今後は生活面の心配がある。

6. 「育児に協力者のない母」

児は修正月齢相応の発達をしているが、夫は育児に非協力的で、母は育児にストレスを感じている。今後は、育児サークルなどの紹介を行い、母のストレス解消を図り、夫の育児への協力を促す必要がある。

7. 「育児不安の強い双子の事例」

不妊治療後の双子。母親に子育てで不安が強く、「双子の会」の紹介や家庭訪問などで関わる。子供の順調

な発育とともに不安の訴えは少なくなっていった。

8. 「極低出生体重児への関わりについて」

患児が入院中から保健婦が母・祖母と電話相談。母自身は1歳で母と死別。施設で育ち、他人との関係が不得意で、家族内でも孤立している様子。母の対人関係のぎこちなさが今後母子関係に何をもたすかの不安もあったが、どのような関わりをもてばよいのか分からなかった。

9. 「第一子第二子とも妊娠中毒症のため帝王切開による出産だった事例」

母親が本態性高血圧。訪問により、母親の睡眠時間が短くなっており、服薬も守られていないなどの問題が明らかになり、高血圧のコントロールの指導が必要であった。

10. 「妊娠中毒症のため帝王切開による出産にいたったことで母が強くショックを受けた事例」

妊娠中毒症のため帝王切開で児を出生したことに非常にショックを受けたとの訴えで、訪問。普通の妊娠出産ではなかったのではなかっただけで、何となくどこかおかしいのではないかと心配していたが、児の主治医に問題ないと言われると安心しており、これが母の精神が安定

するお墨付きになっている。

11. 「施設入所の事例から」

超低出生体重児の双子。10ヶ月間はこども病院に通院していたが、その後は通院が途絶

えてしまった。2歳6ヶ月時に養育困難とのことで施設入所のため来所。精神発達の遅

れ、特に愛着関係のなさに着眼され、愛着形成のため担当保母による指導が行われ、発

達も改善。経過中、保健婦が十分に関われなかった点について考察。

12. 「現在かわり始めた極小未熟児の事例」

児の退院後の経過は順調。家庭訪問を行い、発育・

1) 東京慈恵会医科大学名誉教授、2) 日本赤十字社医療センター新生児未熟児科、3) 日本子ども家庭総合研究所、

4) 名城大学教職過程部、5) 聖マリア病院母子総合医療センター新生児科

発達の指導、母親の気持ちのフォローを行い、その結果は病院へ報告。今後は医療機関のフォローを継続しながら地域でも状況の把握を行い、母親が児に対し気持ちの中でより楽に接することができるように援助の予定。

13. 「極低体重児への関わり」

母は妊娠中より精神的に不安定で（マタニテ - プルー、うつ傾向）精神科で服薬中。児の入院中から訪問を開始。母は育児に対する不安、子供がかわいく思えないなどの発言あり。退院後、夫以外に育児協力者がいないため常に心細さがある。訪問や育児教室への参加を促すなど、同じ子供を持つ親との接触する機会を持つよう勧める。以前に比べ、母の表情が柔らかくなり、併せて児の表情も豊かになり、発語も増えてきている。

14. 「 」

児はまだ入院中の事例。母親は知的障害（IQ 46）あり、父は元暴力団員で、生計は生活保護による。自宅は散らかり足の踏み場もなく、猫が4匹住み着いており、その糞尿で異臭、子供を育てられる環境にない。退院後、乳児院などの施設を勧めるが父親は拒否。このため、退院後の子育て支援について生活保護ワーカー、家庭児童相談室、病棟看護婦、保健所保健婦で協議中。

15. 「精神分裂病の母と極低出生体重児との関わり」

病院からの連絡により保健婦が訪問・指導などの支援を開始。母は無表情で、聞いたことに短く答えるのみだが、保健婦の継続訪問を希望。現在は子育て触れ合い教室など、自分から積極的に母子の集まる場所に参加している。今後、母親と保健婦の信頼関係をもとに、医療機関とも連携を図りながら、母の不安を軽減できる体制を目指す。

16. 「 」

母18歳、父21歳で、育児支援者がいないため、こども病院より退院後のフォロー依頼。退院後4ヶ月ほど訪問していたが、電話番号変更や不在で連絡とれなくなる。その後、1歳7ヶ月で発達遅滞のためこども病院より、心障センターを紹介され、再び母親と連絡がとれるようになる。この事例は、母親が病院での定期健診を励行していたため、病院・心障センター・保健所との連携がとれ、その後の母児の支援が可能となった。

17. 「極小未熟児で今後発達の遅れが予想されるケースへの関わり」

児は入院中に脳萎縮と診断され、発達遅滞が予想されるため、退院後も定期的に療育訓練を受けている。母親は妊娠中に安静指示があったのに活動を控えなかったため、早産になったのではないかと後悔している。児の退院後より家庭訪問を行い、母親の精神的支援と育児に対する自信の回復を目指し、今後子供の生活しやすいような環境づくりとその調整を行う。

18. 「 」

県外に母体搬送された双胎例。児が入院中より、乳房管理について電話相談があり、関わりが始まる。第二子が先に退院し、2ヶ月後に第一子が在宅酸素で退院。妻の実母が手伝っている。保健所からは継続的な家庭訪問・NICU親の会の紹介などを行う。1歳時に第一子が自宅で突然死（急性気管支炎の診断）その後の親への働きかけを含め考察。

19. 「地域医療機関と保健所による低出生体重児の支援について」

不安の強い母親。修正日齢29より訪問し、育児指導を継続して実施している事例。出生直後から医療機関からの情報提供があり、タイムリーに訪問・相談・医療機関へのフィードバックができた。

20. 「極小未熟児を出産した未婚の母」

母親未婚で、父は既婚。児は脳室周囲白質軟化症の診断を受けている。退院後も喘息様の発作を繰り返し、療育センターでの訓練に通園。保健婦は訪問や受診に同行し、母から必要時には電話で相談をしてもらい関係を作った。その後、母の両親が多額の負債を抱えたため、住居を含め経済的な問題が生じ、ワーカーにも関わってもらい生活保護を受ける。今後、地域の障害施設や障害児の親の会などを紹介の予定。

21. 「他機関との連携を要した事例」

未熟児網膜症・脳室内出血のあった児。視力障害児教室、児童福祉センター、病院、保健所、保育園などが関わっていたが、発達の遅れについては主治医から視力障害のあるための遅れと言われていたため、親は初期には通所や訓練には消極的であった。今後、家族が最も望む進路を選べるように、情報を提供し、関係機関とも連絡をとりながら適切な援助を行っていく。

22. 「極低出生体重児ママたちのサークル（カンガルー・クラブ）結成」

母よりの依頼で家庭訪問を開始。保健所での「発達相談」で保健所が把握しているもう

一人の超低出生体重児をもつ母親との交流を働きかける。これをきっかけに「発達相談」

の場で母親達が交流を持つことになり、サークルが形成され、現在入院中の超低出生体

重児の母親へのサークル紹介や励ましの手紙を出すなどの活動を行っている。サークル

の活動は保健所を基点とし、部屋やお茶などを保健所が提供している。

23.「小児慢性特定疾患をもち、育児環境に問題がある児への援助について」

小人症を合併した極小未熟児。母親が自宅で成長ホルモンの注射を行っているが、児の

入院中から「この子はほしくなかった」などの言動あり。経済的にも困窮しており、医

大付属病院、市立病院、肢体不自由児施設、児童相談所、県保健所、市保健センターが

関わっている事例。

24.「双生児で第2子が未熟児網膜症で視力障害のある児への援助」

第1子が健常児で、第2子が障害児。1歳7ヶ月時に母からの希望で家庭訪問。「目にハ

ンデを持っているので、障害を持っている母親同士のサークル活動に参加したい」との

希望。肢体不自由児施設、盲学校と連携しながら支援を行っている事例。

25.「育児環境がとても不安なXちゃん」

産後、母親が「こんな子を生んでしもうて...」と舌打ちしていた。入院中も親が面会に

来ず、連絡がとれないということで、NICUの婦長より保健婦に応援の依頼。家庭訪

問するも、自宅は乱雑で犬・猫が出入りしている。施設に対しては拒否反応が強く、訪問・

指導しながら病院との連携をとり、虐待の恐れがある場合には早期の対応ができるよう

に考えている。

26.「両親ブラジル人で産後双児の育児に困った例」

日本には育児協力者がいない。短期間、祖母がブラジルから来てくれたが、その後は小

児科・眼科・リハビリの通院が必要であり、育児の不安もある。保健婦が家庭訪問しな

がら育児方法・離乳食などの指導を行いフォローしている。

27.「複雑な生育歴をもつ親による育児への影響」

母17歳、父24歳で、経済的理由から妊婦検診は未受診。母・父とも幼い頃に両親が

離婚しており、テレクラで知り合い同棲を始める。父は穏やかで責任感があるようだが

異常行為（飼っているハムスターを壁に投げつけたり、眼球にピンセットを刺して取り

出したりする）を看護婦が聞き出している。母も児に愛情はなく、「ペット・ぬいぐるみ

のような存在」と話す。両親とも育児モデル・親モデルのない環境で育っており、周囲

に支援者もないため、育児指導・育児支援・生活指導が必要である。

28.「障害を持つ極小未熟児の双胎例」

父は定職無く、父・母ともそれぞれの実家で生活していた。兄は2歳で双胎の未熟児は

二人とも口蓋裂・口唇口蓋裂あり。退院後、両親・兄・双胎の5人で生活を始めたが、

父の育児協力は無い。家庭訪問を行っていたが、母が父に児を預けて外出して帰ったら、

二人とも全身チアノーゼで、クモ膜下出血の診断で人工呼吸管理。虐待が疑われ児童相

談所・町・保健所で連携しながらフォローし重症心身障害児施設に入所。

29.「多胎の内特に発達上問題がある児への虐待事例」

品胎のうちの一児で、未熟児網膜症・脳性麻痺。

母はアプローチしてくる児には母なり

に対応するが、アプローチ能力のない本児までは行き届かない状況にある。家庭訪問を

実施していたが、顔面の打撲傷、足底の熱傷などあり。病院の小児科、こどもセンター、

保健所でカンファレンス等により連携し、乳児院入所となった事例。

30.「低出生体重児で発達の遅れのある児と、育児能力に欠ける母親への関わり」

母は知的能力が低く、育児に関する指導事項は理解されないことが多い。退院後から保

健婦の訪問が始まるが、発達の遅れがあり、X病院・Yリハビリ病院でフォローしてい

たが、経済的問題より通園が難しくなる。3歳になりプラダ-ウイリ症候群の診断。両

親の知的レベルや経済的問題あったが、保健婦・主治医・リハビリ病院・保育所などと

連携し指導した事例。

31.「品胎早産にて極低出生体重児の一例」

アパートでは子育て無理と判断し夫の両親と同居。保健所保健婦の訪問による育児指導

や、保健所の障害児早期発見クリニックへ繋げ、市町村保健婦との検討会を行っている。

今後は多胎児の会の育成や地域での育児支援をしてくれるボランティアの育成も大切であ

る。

32.「極低出生体重児が連続している家族と保健婦の関わりについて」

1歳上の第三子も極低出生体重児。早い段階から担当保健婦が家庭・医療機関と連絡をとりながらフォローした。第三子の発達が順調なため、母親は本児の成長について心配していない。母は看護婦で保健婦の介入を回避傾向にあるが、今後もタイミングを見計らいながら継続フォローの予定。

33. 「未熟児（極低体重児）とその親の会結成につながった訪問」

1歳6ヶ月健診で受診した母親から、「子供の発達の遅れからくる親の罪悪感を取り除いたり、情報交換の場などとして、同じ未熟児をもつ親の会を作りたいので協力して欲しい」との要請があった。対象者へのアンケート調査や訪問で参加を呼びかけ、「未熟児親の会」の結成にこぎつけた。参加者は親子と保健婦で、保健婦が会の側面的支援・調整に携わっていく予定である。

34. 「多胎児の訪問を通して」

品胎。訪問・指導の際に公的サービスや民間ヘルパーを紹介（しかし、民間ヘルパーは経済的理由もあり続けられない）。また「他の多胎児の子育てについて知りたい」との希望があり、近くに住む多胎児を持つ母親を紹介する。3人の子供を連れて外出するのは難しいが、母親どうし・地域との繋がりができ、くることを期待している。

35. 「発達の遅れを認めない母親への援助」

2歳7ヶ月に「言葉の遅れがあるので保育園に入りたい」との相談から保健婦が訪問。保健所の二次相談でMRの疑いと診断。幼児教室や保育園に通園していたが、「訓練」を勧められても受け入れず、母親が「訓練」「療育」の必要性を認識するまで時間を要した事例。

36. 「超未熟児の母親に対する支援」

病院退院直後より訪問指導をほぼ月に1回のペースで行う。主治医による健診でも順調とされていた。1歳1ヶ月に脳性麻痺の疑いありといわれ訓練を勧められ、2歳半で脳性麻痺と診断。それまで健診で順調といわれてきたことへの不満・不信が強い。保健婦の役割として医療機関との連携を図りながら、両者の信頼関係が損なわれないよう調整することの重要性について考察。

37. 「極低出生体重児の保育所入所」

PVLの児だが、主治医は父には将来の障害の危険性を説明してあるが、母には詳しく説明していない。母は育児休業終了後に職場復帰

を希望し、保育園への入園希望あり。

保育園・福祉事務所では園では訓練できないことなどから難色が示された。「障害児には療育センターがある」「仕事を続けたいという母の思いを叶えたい。そこに母の安定があり、児に帰っていく」など様々な意見があり、判断の難しさがあったが、結局試行入園扱いとなった事例。

38. 「障害のある双子を出産した女性とその家族への関わり」

母は精神科で投薬を受けており、父（元組員）とは内縁関係で、第一子は発達遅滞？。

双胎の一児は脳性麻痺・難聴で主治医から家庭での養育が難しいのではないかと児童相談所に連絡があり、関係機関（病院ケースワーカー、精神科担当医、生活保護ケースワーカー、保健婦など）が協議し家庭環境より施設入所が適切と判断。当初、母は施設に否定的であったが、保健婦の訪問・話し合いのなかで納得した事例。

39. 「両親の離婚後の児の療育について」

多発性脳梗塞を合併した児。児の入院中に両親が離婚、父が児をひきとることになった。退院後は祖母が中心になって育児を行い、月に12回保健婦の訪問を行っている事例。

40. 「超未熟児で出生し重度の障害のあるケース」

未熟児網膜症、頭蓋内出血、先天性鼻翼欠損を合併した児。重度の発達障害あり、4歳6ヶ月に突然死。経過中、保健婦は継続して関わりを持っていたが、親は児の療育についての情報は主に親の会の友達から得ていた。今後は自分達の地域にどのような人的・物的資源があるかを整理し、ネットワークを作り適切に保護者に提供していく必要がある。

41. 「極低出生体重児の母親への育児支援を考える」

双胎で一児は気管切開の状態退院、二児は未熟児網膜症。保健婦による訪問指導に加え、乳幼児健診を含め幾つかの医療機関でのフォローが必要であった。関わる機関が多いほど親へのサポートは強力となるが、一方で連携が不可欠になる。また、地域での支援体制として発達指導・相談の場と、育児に関する日常的な援助の場が重要であると考察。

42. 「双胎・極低出生体重児・ネグレクトで支援を要した事例」

父は育児への協力はほとんどない。入院中から両親の療育態度は気になる点があったとのこと。退院後も訪問して経過をみるが、児をおいたまま外出したり、育児環境も不潔であった。6ヶ月より体重増加

が停滞し、8ヶ月より体重減少。離乳食も進んでおらず、普段は別室にいて泣いた時だけ様子を見に行くが、ほとんど泣かないため授乳も怠ることもあった。受診を勧めたが他地域に9ヶ月で転出。その後の情報では、再び体重減少し入院。退院の際に児童相談所が介入し、関係機関が連携しながら支援中である。

43.「極低出生体重児で生まれ発育・発達に遅れを残している事例」

退院後より、訪問・電話相談を継続。発達の遅れがあり、保健所の発達相談、集団訓練、個別相談などを紹介。2歳6ヶ月で発語なく、母の不安も大きい。今後、他機関との連携を図りながら児の発達を保健所でも支援していく。

44.「外国人母子における保健所のかかわりについて」

両親タイ人で在留期間は切れており、日本語は通じない。養育医療の申請から保健所との関わりが始まる。様々な手続きの説明を行い、児は長期入院となっており、病院とも連絡を継続。母は1歳5ヶ月時より行方不明になる。不法滞在者の母子への対応について考察。

45.「当保健所における低出生体重児へのアプローチ」

日齢3に父親が養育医療申請のため保健所に来所した時に、地区担当保健婦が面接し、退院後のサポート体制を説明。入院中より母親から電話連絡あり、退院翌日の訪問を約束。退院にあわせて病院から継続看護連絡票の送付あり。その後も家庭訪問を継続し、現在順調な発達経過である。

46.「虐待が疑われるケースへの関わり」

6ヶ月間の長期入院例。入院中より「自分の子どもという実感がない」「お人形のように思う」と話していた。退院10ヶ月後、母親から保健所に相談の電話があり、「何度も叩いた」「ベランダから放り投げたい」「雑誌でみた児童虐待のケースと私はそっくり」と言う。乳児院への入所は拒否。保育所へ入園するが、欠席がちで、虐待は続いている。保健所・主治医・保育園など関係機関が協議しながら、母子支援を継続している。